

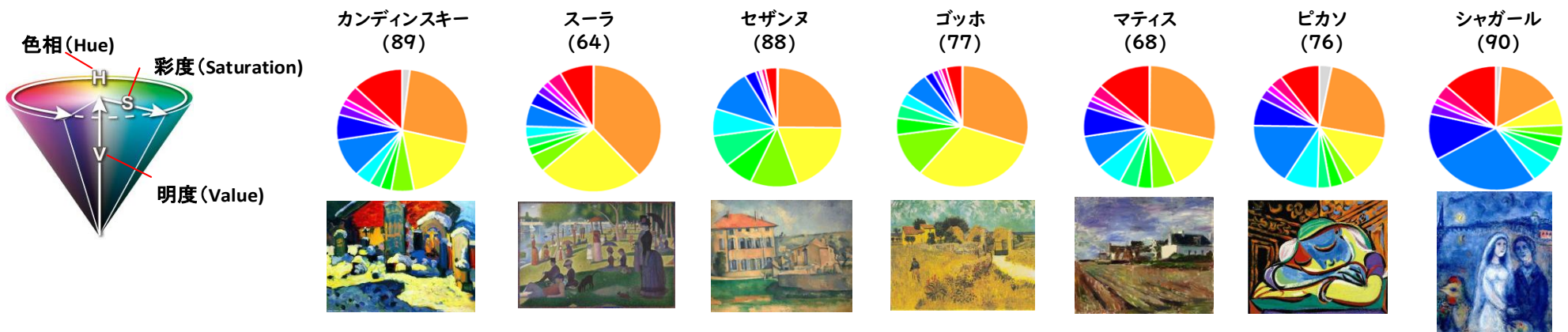
『筋ジストロフィ患者作品と色使い』

北口正敏 佐藤宏道 (大阪大学医学系研究科認知行動科学)

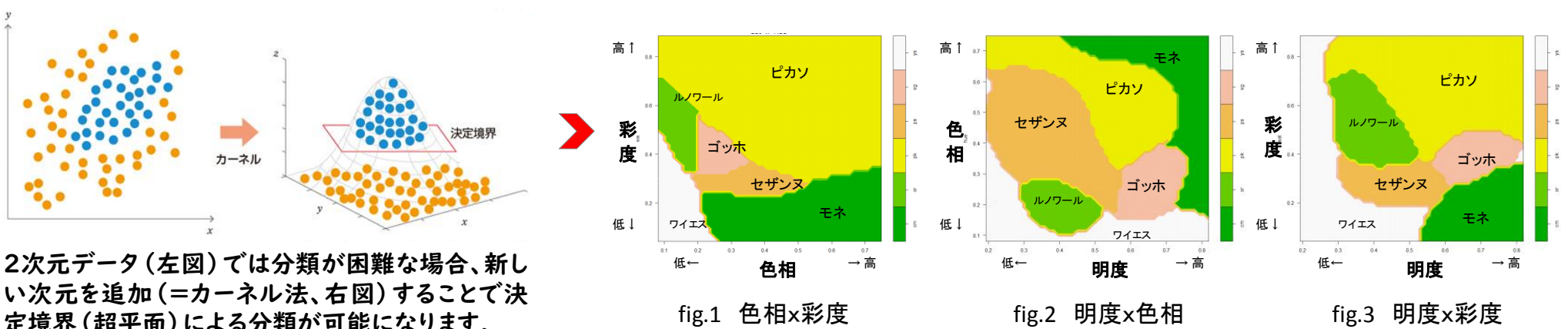
私たちは、絵画に用いられている色彩について解析しています。セザンヌ、ピカソ、ゴッホなど有名な画家の絵にはそれぞれ特徴があります。ここでは7人の画家の作品をそれぞれ60-90作品ほど集めて、どのような色を用いているか比べてみました。多くの画家は茶色と黄色の範囲の色を多く使い、青紫と青の範囲を多用したのはシャガールだけでした。

一般画家と色分析

・人間の感性に近いとされるHSV色空間(色相x彩度x明度)で表された絵画を代表色(12色相環)の割合で比較した。(カッコ内は分析に用いた作品数)



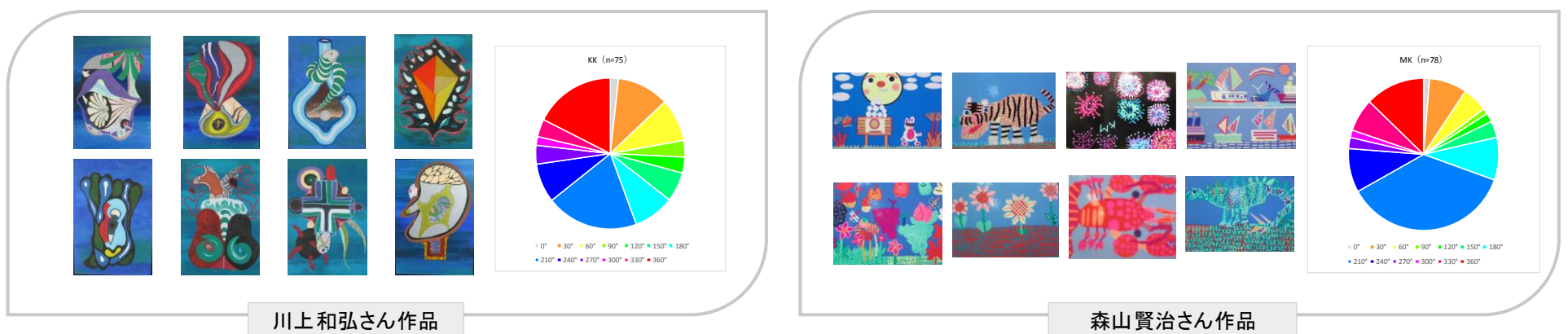
・とりあげた7名の画家の内、カンディンスキーからピカソまでの6名の画家は、茶・黄色の範囲の色を多用したのに対し、シャガールだけは青紫・青の範囲を多用しました。



ところで、筋ジストロフィーという、成長につれて筋肉が衰えていく難病があります。この病気の治療法はまだありません。とくに、デュシェンヌ型筋ジストロフィー(DMD)3歳くらいで病気が始まり、多くの患者さんは10歳頃で歩けなくなり、車椅子や病院での長い入院生活を送り、若くして亡くなります。患者さんたちは入院中に、いろいろなやり方で、自分の心を表してきました。私たちは絵画の色解析の過程で、デュシェンヌ型筋ジストロフィーの患者さんが描いた絵の色の使い方には特徴があるという医師の話聞き、それを調べて見ました。下に示したのは、国立病院機構徳島病院のデュシェンヌ型筋ジストロフィーの患者さんの作品と、色の使い方です。

「筋ジストロフィー患者(デュシェンヌ型)患者の色遣い」

・筋ジストロフィー患者(DMD型)作品例と色遣い傾向(カッコは分析に用いた作品数)



色遣いの特徴

- ・デュシェンヌ型筋ジストロフィー患者は、「青紫・青・空」を多用する傾向がある→このことは、赤緑色盲である可能性を示唆します。
- ・正常色覚者の作品では、「茶・黄」が多用される傾向が見られます。

どうですか? 左の川上和弘さんの作品と、右の森山賢治さんではえがかれているものがまったくちがいますが、どんな色を使っているかを調べて見ると、青色が多く、茶色と黄色が少ないことがわかります。そうです。最初に見ていただいた、シャガールと同じような色を使っています。実はこのタイプの筋ジストロフィー患者は眼の網膜にも筋ジストロフィーの原因となる異常タンパクがあるため、色覚異常が起こり、色の見え方が普通の人と違って、特に赤・茶・黄・緑があまり区別できず、青ははっきり分かるという人が多いのです。患者さん達は独特の色遣いで、毎日の生活や自分の心を表現し続けました。